

---

# 大晦日のスノードロップ

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

大晦日のスノードロップ

### 【Nコード】

N2204B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

エカテリーナ二世の時代のロシア。女帝がスノードロップを持って来た者に褒美をやると聞いた小さい姉妹は夜にこっそりと花を探しに行き。有名な十二月の童話にヒントを得たお話です。

## 第一章

### 大晦日のスノードロップ

ロシアにまだ皇帝がいた頃の話だ。ペテルブルグの側の小さな村に三人の家族が暮らしていた。

家にいるのは母親と二人の娘。三人はつつましかながらも仲良く楽しく暮らしていた。

母親の名前はオリガという。ロシアの女らしく豊満な身体で気のいい性格をしていた。夫を早くになくしたが明るい性格で子供達を包んでいた。そして娘達は可愛らしく素直な性格をしていた。

姉はマーシャという。金色の髪に青い目、そして白い雪の様な肌を持つ可愛らしい少女だ。母と妹は茶色の髪に緑の目だが彼女だけ違うのは父親の血らしい。

「御前は御父さんに似たんだね」

母はそんな彼女を見て優しく笑っていつもこう言うのであった。

「その青い目で幸せを掴むんだよ」

そのうえでいつもこう言うのであった。

妹のリーザに対してもそれは同じだった。そばかすのある可愛い顔を眺め、自分と同じその茶色の髪を手にとって言うのだ。

「この茶色の髪で幸せを離さないようにね」

子供達にそれぞれ幸せになれと言う。自分が早くに夫をなくしたせいであろうか。子供達には幸せになって欲しいと思っっているのである。本当に優しい母親であった。つつましかで何も無い、生活だったが三人は幸せだった。互いに身を寄せ合って暮らしていた。

そんな日々を過ごしていたある日。都の方から変な話が出て来た。

「スノードロップを!？」

「うん、皇帝陛下が好きだからって」

家の中。暖炉の火をあたりながらリーザが驚くマーシャにそう話

していた。

「それで新しい年には宮殿のあちこちをスノードロップだらけにした  
たって言ってるらしいよ」

「皇帝陛下がそんなことを仰ってるの？」

「あれ、お姉ちゃん知らないの？」

妹は向かい合って座っている姉にこう言った。その側では暖炉が  
暖かい火を出していた。

「今の皇帝陛下はね、女の人なのよ」

「それは知ってるわよ」

マーシャは何を今更といった顔でリーザに返した。

「ドイツの方から来た方よね」

「そうそう」

この時のロシアの主はエカテリーナ二世であった。ロシアきつて  
の啓蒙専制君主であり今もなおロシアの歴史において名君と讃えら  
れている。文化を愛する女帝として知られとりわけフランス文化に  
耽溺していた。元々ロシアは西欧文化と言えばフランス文化とい  
う程フランスの文化や芸術を追い求めていた。花も好きなことで知ら  
れているのである。

「それでお花をって」

「今冬よ」

マーシャは困った顔で述べた。

「おまけにここは」

「寒いよねえ」

ペテルブルグは極めて寒い。そもそも花自体が少ない。それな  
に女帝はそんなことを言い出しているのである。

「おまけにスノードロップって無理よ」

「そうよね」

この辺りではスノードロップはあまりにも寒いせいか春にならな  
いと咲かないのだ。無理な話にしか思えなかった。今は言うまでも  
なく冬である。

「けれどね、お姉ちゃん」

「何？」

リーザはさらに姉に話した。

「若し見つけてきたらね。お金たっぷりだって」

「お金が」

「そうよ、皇帝陛下だから。お金もたっぷりと出してくれるわよ」

「そうしたらおうちもお母さんも」

「ずっと楽になるわよ」

「そうよねえ、それだけお金があれば。お母さんだって」

「ああ、そんなの気にしなくていいんだよ」

ここで奥で家の用事をしていたオリガが二人に言った。

「お母さん」

「こんな冬にスノードロップが咲くわけじゃないじゃないか」

「それはそうだけれど」

「確かにね、お金は欲しいよ」

「ええ」

「それでもある筈のないものを探しに行くなんて馬鹿なことなんだ

よ

「けれど森の奥に行けばひよっとしたら」

リーザはそれでも言った。

「あるかも知れないわ」

「森の中かい？絶対に引っっちゃ駄目だよ」

お母さんはリーザがそう言ったのを聞いてすぐに止めた。

「どうして？」

「森の中はね、とても危ないからだよ」

「狼とか？」

「それだけじゃないんだよ。怖い妖精まで一杯いるから。だから行

っちゃ駄目なんだよ」

「そうなの」

「そうなのっていつも行ってるじゃないか。いいかい」

そして二人に対して言った。

「私はね、あんた達さえいてくれたらいいんだよ。お金は幾らあってもあんた達がいなくて何にもならないんだよ」

これは母親としての言葉であった。

「お母さん」

「わかったね、だから馬鹿なことを考えるんじゃないよ、いいね」  
「うん」

二人はその言葉に仕方なしだが納得して頷いた。お母さんの気持ちにはよくわかったからだ。

「わかってくれたらいいよ」

娘達が頷いたのを見て安心した。その日はそのままベッドに入ってしまった。

だが。そのベッドの中で娘達は話していた。

「ねえお姉ちゃん」

子供達の部屋でリーザはマーシャに声をかけていた。

## 第二章

「何？」

「お昼のお話だけれど」

暗がりのベッドの中で姉の顔を見て言う。

「スノードロップのこと？」

「うん、すっごいお金貰えるんだって」

「どれ位？」

「お貴族様になれる位らしいわ」

「そんなに」

マーシャはそれを聞いて思わず言葉を失った。

「それだけあつたらお母さんもずっと楽になれるわよね」

「楽になれるどころじゃないわ」

マーシャは考えながら言った。

「億万長者になれるわよ」

「そんなに」

「そうよ、それだけあつたら」

「お母さん幸せになれるよね」

「ええ」

ベッドの中で頷く。そして決心した。

「行く？」

「うん」

リーザも。二人は一緒に頷いた。

「最初からそのつもりだったから」

「わかったわ、それじゃあ」

まずはマーシャがベッドを出た。そしてすぐに服を着る。

「二人で行きましょう、森に」

「森にね」

リーザもベッドから出ていた。そして服を着ながら姉に問う。

「ええ、森に行ったらあるかも知れないわ」

「けれど森は」

「大丈夫よ」

リーザは強い声で妹に言った。

「狼も熊も。私に任せて」

「何かあるの？」

「ええ、まずは」

暗い部屋の中を探す。

「これを」

火打石を見つけて懐に入れた。

「それでこれ着て」

「外套、それにマフラー」

「外は雪だから」

窓を指差しながら言う。見れば夜の闇の中に白い雪がしんと降っていた。

「凍えないようにね」

「わかったわ。じゃあ」

「いい、私から絶対に離れないでよ」

また妹に対して言った。言い聞かせるように。

「離れたら何もならないから」

「ええ、それじゃあ私は」

リーザはリーザでナイフを取ってきた。

「ナイフ？」

「森の中でわかるわ」

リーザはにこりと笑って姉に応えた。

「何でナイフ持つのか」

「狼や熊と戦うとか？」

「それだとナイフじゃ駄目よ」

それは笑って否定した。

「けれど別のことに使えるわ」

「別のことって?」

「それは森の中でね」

最後まで言おうとはしなかった。だがリーザにも何かの考えがある、それだけはわかった。そして今はそれだけで充分であったのだ。二人はこっそりと家を出た。その際何本も薪を持っていた。

「薪?」

「そうよ、絶対に雪で湿らせないでね」

マーシャはまずリーザにそう注意した。

「これが私達を助けてくれるから」

そう言っただけの中の本に火を点けた。忽ち燃え上がる。

「これでいいわね。幸い風もないし」

風まであったらどうしようかと思った。だが幸いにしてそれだけはなかった。これは二人にとっては僥倖であった。

「じゃあ行きましょう」

リーザにも一本手渡して言った。

「薪がなくなったら森の中で拾うわよ」

「火を灯りにするのね」

「そうよ、けれどそれだけじゃないわ」

マーシャは言った。

「これで狼や熊も怖くないから」

「こんな火で?」

「火だからよ」

妹にそう答えた。

「火だから。私達を守ってくれるのよ」

「そうなの」

「動物って火を怖がるから」

それが彼女の狙いだった。

「妖精だって近寄れないわよ。だから安心して」

「わかったわ、お姉ちゃん」

「じゃあ行くわよ」

## 大晦日のスノードロップ

「うん」

二人は森に足を踏み入れる。そして中へ中へと進んでいく。

### 第三章

森は雪に覆われていたが火の灯りに照らされそれを頼りに先に進むことができた。リーザはその行く先々でこれだという木を見つけ、ではその雪を払って十字の傷をナイフで切り込んでいた。

「何をしてるの？」

「目印つけてるの」

リーザは姉の問いにそう返した。

「目印」

「うん、道に迷っても無事に帰られるように」

その為のナイフであったのだ。木に傷をつける為の。

「こっやってればわかるよね」

「そうね、よく考えたわね」

「だってスノードロップ摘んでもそれを持って帰らないといけないから」

リーザは言った。

「だから。こっしてるのよ」

「そうだったの」

「お姉ちゃん、絶対にスノードロップ見つけようね」

そのうえで姉にこっ言った。

「そして持って帰って」

「ええ、絶対にね」

「それでお母さんを楽にしてあげよう」

二人はその為に森の中に入ったのだ。雪も夜も獣も恐れずに。全ては母親の為。その為に森に入ったのであった。

森の中を少しずつ進んでいく。まだスノードロップは見つからない。い。

「ないね」

リーザが下を見下ろしながら言った。雪と闇に隠れているのかそ

れは見当たらない。

「森の中だつたらあると思つたのに」

「まだ諦めるには早いわよ」

マーシヤは弱気になる妹を励ました。

「まだ入つたばかりなのに」

「そうか」

「そうよ、だからまだ探しましょう」

そしてこう言った。妹に対して言ったが半分は自分に対してだつた。

「きっとあるから」

「うん」

二人は探し続けた。だが見つかりはしない。困り果てていた時にふとリーザがマーシヤに声をかけてきた。

「お姉ちゃん」

「見つけたの？」

「御免、違うけど」

だがリーザは言った。

「考えたんだけれど」

「ええ、何を？」

「私達でスノードロップ作らない？」

「私達でって？」

「ほら、お姉ちゃん刺繍得意だし」

「ええ」

マーシヤは刺繍では誰にも負けはしなかった。これに関しては絶対の自信があった。

「私も。アクセサリーとかなら出来るから」

「けれどそれスノードロップじゃないし」

「いえ、スノードロップよ」

リーザは言った。

「いつも咲いているスノードロップ。それじゃあ駄目かしら」

「そうね」

彼女は妹の言葉に考え込んだ。それから言った。

「陛下ってそうしたこと怒られない方だったわよね」

「刺繍とかお好きらしいけれど」

女性だからであろうか。この時の女王は刺繍やアクセサリーが好きなことで知られていた。

「やってみる？」

「うん、それじゃあ」

リーザは頷いた。

「まずはおうち帰ろう、そしてね」

「ええ、それで」

二人は早速リーザがつけた目印を頼りに家に帰った。そして少しずつだが刺繍とアクセサリーを作っていた。それから暫くして。

かなりの数のスノードロップの刺繍とアクセサリーが出来上がった。

「これ、陛下にお渡しすればいいのよね」

「ええ」

「やっと出来たこれを」

もう大晦日前になっていた。何とか間に合った形であった。

「陛下が気に入って頂けたらだけれど」

「大丈夫よ」

リーザはにこりと笑ってマーシャに言った。

「きつと気に入って頂けるわ」

この言葉には何の根拠もなかった。だが彼女は確信していた。これなら、と思ったからだ。マーシャも妹のその言葉に何故か納得するものがあつた。そして頷いた。

「そうね」

「ええ、だからね」

リーザはまた言った。

「お渡ししましょう」

「ええ」

## 大晦日のスノードロップ

こうして二人は役人を通してそれを女帝に渡した。この時女帝エカテリーナはツアールスコエセローにおいて執務を執っていた。だが民からのスノードロップを贈られたと聞いて顔をそちらに向けた。

## 第四章

「スノードロップを」

「はい」

マーシャ達から刺繍やアクセサリーのスノードロップを受けた役人から大臣の一人に話は及んでいた。大臣は恭しく一礼してから女帝に述べた。

「御覧になれますか」

「まさか本当に届くとは思っていませんでした」

彼女はその面長ながら整った顔に思案の色を巡らせた。

「あれから私も考えまして」

「左様ですか」

「スノードロップなぞ今このペテルブルグにある筈もないと。それで取り消そうと思っていたのです」

「ですがそれが届きました」

大臣は何か思わせぶりな笑みを浮かべた。エカテリーナの方もそれに気付いた。

(何かあるのかしら)

心の中で呟いた。だがそれは顔には出さない。

「それでは」

彼女は表面上は何もない様子で言った。

「そのスノードロップをこちらへ」

「はい」

大臣はそれに頷き一礼して部屋を後にした。エカテリーナは彼の退出する姿を見ながら考えていた。

「何が出て来ても驚かないではいようかしら」

それはロシアの主としての誇りであった。大きく構えるつもりであったのだ。

程なくして大臣が戻ってきた。その手には籠がある。

「その籠の中にあるのですね」

「はい」

彼は笑みを含めて答えた。

「左様でございます」

「わかりました。では」

エカテリーナはそれを受けて言った。

「その籠をこちらへ」

「はい」

大臣は進み出てその籠を差し出した。見れば木で編まれた質素な籠であり覆いが為されていた。エカテリーナはそれを受け取るとすぐにその覆いを取った。そして中を見た。

「これは」

「これがスノードロップでございます」

大臣はあえて芝居がかった口調で述べた。

「如何でしょうか」

「何と」

威厳を保ち続けていた女帝がこの時は少女の顔に戻っていた。そして刺繍を手を取っていた。

「スノードロップを布に」

「アクセサリーもございます」

「これね」

「はい」

そこには刺繍だけでなくアクセサリーもあつた。それもエカテリーナの目に入った。

「成程、確かにスノードロップです」

エカテリーナはそれを見て満足そうに頷いた。

「見事な。確かに受け取りました」

「左様ですか」

「はい。こうした花があるのは忘れていました」

そしてこうも述べた。

「花は咲いているだけが花ではないと」

「実は私はこれを受け取った時迷いました」

大臣はここで正直に自分のことを述べた。

「陛下にお渡ししてよいものかと。ですが」

「何かあつたのですね」

「はい、殿下が。是非お渡ししてくれと」

「殿下というと」

「アレクサンドル様です」

「そう、あの子が」

エカテリーナはアレクサンドルという名を聞いて頬と目元を緩ませた。彼はエカテリーナの孫であり彼女が手塩にかけて手元で育てている秘蔵っ子なのである。彼女にとっては目の中に入れても痛くない程の可愛い孫なのだ。

「それでお渡ししました。気に入って頂けたようで」

「私はどんな花でも好きなのですよ」

エカテリーナは笑みを浮かべ続けたまま言った。

## 第五章

「こつした花も」

「殿下もそう仰っていました」

「流石はアレクサンドルですね」

彼女は孫を褒めた。

「貴方にそう言うなんて」

「おかげでよいものをお届けるすことができました」

「それで」

「はい」

話は移った。

「この花を作ったのは誰ですか？」

「農家の姉妹です」

「農家の」

「はい、都の側の。小さい娘達です」

「子供達を作ったのね」

「そうです」

「そうだったの」

エカテリーナはあらためて刺繍とアクセサリーを眺めた。実に綺麗なものでとても子供が作ったとは思えない程だった。

それに。心が感じられた。真心が。彼女はそれにも気付いていたのだ。

「アレクサンドルを呼んで下さい」

「殿下をですか」

「はい。そして馬車も用意して」

彼女は続けて指示を出した。

「宜しいですね。行くところができました。すぐに発ちます」

「わかりました。それでは」

女帝はすぐに動いた。そして都を後にしてある場所に向かうので

あつた。

刺繍にアクセサリーを作り終えたマーシャとリーザはそのまま母の手伝いに戻った。相変わらずつつましやかな生活を送っていた。

「そういえばお姉ちゃん」

暖炉の側で椅子に向かい合って座って編み物をしている二人。リーザが姉に声をかけてきた。

「何かしら」

「今日大晦日だよ」

「そうだったの」

マーシャは妹に言われるまでそれに気付いていなかった。

「うん、今年ももう終わりだね」

「そうだね」

編み物をしながらそれに頷く。彼女は幼いながら仕事に終わられてそれを忘れてしまっていたのだ。

「陛下に届いてるかな、もう」

「スノードロップ？」

「うん、届いてたらいいね」

「そうね」

妹の言葉にこくりと頷く。

「きつと届いてるよ」

「そうかな。だったらもうそろそろお知らせが来る筈だけれど」

リーザは首を傾げてこう言った。

「だって。もう大晦日だし」

「待ってればいいのよ」

首を傾げる妹に対して言った。

「届いてたらきつと返事が来るから」

「そうね」

「そうよ。だから待ちましょう」

「うん。ところでね」

「何かしら」

二人は暖かい暖炉の側で朗らかに話を続ける。この時母は市場に出掛け麻を買いに言っていたのだ。だから今家にいるのは二人だけであった。

「この編み物どうかなあ」

「どんなの？」

妹が見せた編み物を覗き込む。それは中々よい出来であった。

「いいんじゃない？」

マーシャはそれを見てこう言った。

「綺麗にできてるわ」

「そう？」

リーザは褒められてその顔を晴れやかなものにさせた。

「ええ、色合いがね。いいわ」

「結構考えたのよ、これ」

リーザは晴れやかな顔をそのままにしてこう返した。

「どうしようかなって」

「考えた介があつたわね」

「うん。じゃあ次はね」

編みながら朗らかにお喋りを続けていた。そこで扉をノックする音が聞こえてきた。

「誰だろ」

「私が出るわ」

マーシャが席を立った。そして扉の方に向かう。櫛の木で出来た重い扉である。

「はい」

扉を開ける。するとそこには着飾った一人の女の人立っていた。服装だけでなく雰囲気も立派であった。威厳と気品が立っているだけで感じられる。そんな人がそこにいた。

「あの」

マーシャはその雰囲気飲み込まれそうになりながらもその人に声をかけた。

「何か御用ですか？」

「一つ聞きたいことがあるのだけれど」

その人はマーシャを見下ろして尋ねてきた。

「はい、何か」

「あれを」

「はい」

その人が声をかけると役人の人が後ろから何かを持って来た。マーシャ達が刺繍やアクセサリーを渡したあの役人の人である。とても偉い人だと思っていたのにこの人はその役人を平気な顔で使っていた。そのことからこの人が普通の人ではないのがわかった。

## 第六章

その人が持つて来たのはスノードロップだった。マーシャ達が作ったあのスノードロップだ。それを持つてきたのである。

役人は女の人にそれを手渡した。女人はそれを受けてからマーシヤにまた顔を向けてきた。

「それでね」

「あの」

マーシヤはここであることに気付いた。

「お外、寒いですよね」

「えっ」

その人はマーシヤにいきなり言われて少し目を大きくさせた。

「ですから。中に入りませんか」

「貴女のおうちにかしら」

「はい、宜しければ」

マーシヤは言った。

「どうぞでしょうか」

「いいのかしら」

女の人はそれを受けてまた尋ねてきた。

「私が中に入っても」

「ええ、寒いでしょうから」

マーシヤは優しい声でこう言った。

「よかったですら。どうぞ」

「じゃあ御言葉に甘えて」

その人はそれを聞くとまずにはにこりと笑った。そしてこう述べた。

「お邪魔させてもらっわ」

「はい」

「あの」

「いいですよ」

その人は止めようとする役人に顔を向けて言った。

「この子が折角案内してくれたのですから。好意は受けるべきです」  
「そう仰るのならいいですが」

「ではアレクサンドル」

「はい」

今度は傍らにいる黄金色の髪の少年に声をかけた。着飾った服も立派な美しい少年であった。何処か少女を思わせる容貌であった。

「貴方も来るかしら」

「宜しいのですか、御祖母様」

「ええ、いいわよ」

彼女はにこりと笑って孫に応えた。

「貴方のおかげでここに来ることになったのだから」

「わかりました。では」

「ええ」

二人はマーシャの家の中に入った。粗末な部屋の中でマーシャとリーザが並んで立って二人を迎えていた。

「ようこそいらっしやいました」

まずはマーシャがぺこりと挨拶をした。リーザもそれに続く。

「何も無いおうちですけど」

「よかつたらお座り下さい」

「それでは御言葉に甘えて」

女の人がテーブルに座った。アレクサンドルはその横に立った。

そしてまずはテーブルの上で刺繍とアクセサリーを広げた。

「それは」

「これを作った人だけけど」

女の人は二人を見上げながら尋ねてきた。

「貴女達かしら」

「は、はい」

二人は戸惑いながらもそれに答えた。

「そうです」

「けれどこれをどうして」

二人にはこの人がどうして自分が女帝に献上したこのスノードロップを持っているのかわからなかった。まさか女帝が自ら来ているとは夢にも思わなかった。

「そう、やっぱりね」

女の人はそれを聞いてあらためて微笑んだ。

「アレクサンドル」

そして孫に顔を向けた。

「この娘達よ、私にこれをくれたのは」

「私って」

「まさか」

「うん、そうだよ」

アレクサンドルが二人に答えた。

「この方はこのロシアの主エカテリーナ陛下なんだよ」

にこりと笑ってこう述べた。それを聞いた二人は思いきり驚いた。

「ええっ!?!」

「まさか」

流石にこれは信じられない。嘘だと一瞬思った。だが。アレクサンドルもその横に座るこの人も嘘を言っている顔ではなかった。二人はこれもわかった。

「そのまさかよ」

その女の人エカテリーナはまたにこりと笑ってきた。

## 第七章

「だって。私でなければこの贈り物を今持つてはいないわ」

「それはそうですけど」

「けれどどうしてこんなところに」

「贈り物に感謝するのは人として当然のことです」

エカテリーナは優しい笑みをたたえたまま二人に述べた。

「違いますか？」

「はあ」

呆気にとられる二人。それは母親によく言われてきたことだが相手が相手である。このロシアの主がまさか自分達に直接会いに来るとは。信じる方が無理な話であった。

「それで御礼を言いに来たんだよ」

呆然とする二人にアレクサンドルはまた言った。

「ちよつと宮廷を抜けてね」

「そうだったのですか」

「そうよ、それで」

話は本題に入ってきていた。

「まず約束通り貴女達のおうちには御礼を差し上げるわ」

「御礼を」

「そうよ。少なくともずっと楽しく暮らせるようにね」

「お姉ちゃん、じゃあ」

「うん」

二人はエカテリーナのその言葉を聞いてようやく我に返った。そして笑顔で顔を向け合う。

「お母さん楽になるね」

「そうね」

「お母さんの為にこのスノードロップを作ったのかしら」

「はい」

二人はその言葉に頷いた。

「だって御褒美があれば」

「お母さんも今みたいに苦労して働くことはないと思って。それで」

「そういうことだったのね」

「自分達の為じゃなくて母親の為に」

そのことがエカテリーナにもアレクサンドルにも素晴らしいことに映った。実は二人はあまり家庭には恵まれてこなかった。今はこうして祖母と孫で仲良くしているがそうなるまで夫や息子、そして父親のことで苦労し続けてきたのである。そうした過去があるからこの二人のことが素晴らしいことに思えたのである。

「御祖母様」

アレクサンドルがエカテリーナに声をかけた。

「ここは」

「ええ、わかっていますよ。アレクサンドル」

エカテリーナは孫に優しい笑みで応えた。

「ではスノードロップの御礼は貴女達の御母堂に」

「有り難うございます」

「これでお母さんも楽になれるわね」

「そして」

「そして!？」

笑みを向かい合う二人にエカテリーナはまた述べた。二人はすぐにそちらに顔を戻した。

「貴女達には私が」

「陛下が」

「そして僕からも」

アレクサンドルも言った。二人はそれを聞いて一体何があるのだろうと思った。それが何なのか全く見当がつかなかったのである。

「贈り物をね」

「贈り物」

「陛下から私達に」

「座りなさい」

エカテリーナは二人に対して言った。

「えっ」

「いいから。そこに跪くのです」

「は、はい」

「わかりました」

二人は何が何なのかわからないままそれに応えた。そして言葉通り跪いたのである。

エカテリーナは立ち上がり二人の前に来た。それからアレクサンドルが持っていた剣を受け取りそれを抜いた。その刀身で二人の肩を抱いた。

「これが私から貴女達への贈り物です」

「これってまさか」

「そう、君達は貴族になつたんだよ」

アレクサンドルが二人に言った。

「貴族つて」

「嘘……」

「嘘ではありません。今私が貴女達の肩を叩いたことこそが何よりの証」

「君達はその優しさに見合うものが与えられる価値があるから。それでだよ」

「けど貴族なんて」

「私達そんな」

「真に尊い心を持つ者こそが尊い者になるべきなのです」

エカテリーナも二人に対して言う。

「だからこそ。私は貴女達を貴族にしたのです」

「はあ」

「けれど私達は」

「いや、君達の心は僕も御祖母様も受け取ったよ」

まだ謙遜しようとする二人にアレクサンドルはまた言った。

「そして僕からもお願いがあるんだ」

「殿下からも」

「そうさ、友達になつてくれないか」

「御友達に」

「うん、君達のような優しい心を持つ子達を友達に欲しいんだ。いいかな」

「殿下がそう仰るのなら」

「私達でよければ」

二人はアレクサンドルを見上げて言う。夢を見ているような顔であつたがそれに応えた。

「御祖母様、それで宜しいですね」

「君主となる者として必要なものは何か」

エカテリーナはそれに応えてアレクサンドルの顔を見ながら言った。

「私は貴方にいつも教えている筈ですよ、アレクサンドル」

「はい、威厳と公平さ、そして」

「優しさであると。そうですね」

「はい、ですから私は彼女達を」

「よいのですね、それで」

「はい、ですから」

「わかりました。それでは」

彼女は孫の願いを聞き入れた。そして娘達と彼の間に入る。それからその手で三人を包み込んだ。

「よいですか、心優しき子供達よ」

「はい」

「その気持ち、忘れてはなりませんよ」

「優しさを」

「そう、貴女達は母親を想う気持ちを」

マーシャとリーザに対して述べた。次にアレクサンドルに顔を向けた。

「そしてアレクサンドルはそれを知り、近付こうとする気持ちをよいですね」

「はい」

「わかりました。御祖母様」

三人はそれぞれエカテリーナの腕の中で頷いた。

「時として優しさを忘れそうにもなります」

それはこの国の主としての言葉であった。国の主であるということとは多くの苦難も伴うことであるからだ。それは彼女自身が誰よりもよく知っていた。

「けれど、それが忘れられなかったら」

「その時は」

「今のように祝福が待っているのですよ。よいですね」

「祝福が」

「今の気持ちを忘れなければ」

エカテリーナは三人を包み込みながら語り続けた。その言葉は三人を包み込み何時までもその心に残るのであった。

スノードロップがもたらした幸福。それは本当のスノードロップではなかったかも知れない。しかし本当のスノードロップよりも豊かなものをエカテリーナとアレクサンドル、そしてマーシャとリーザに与えたのであった。

一家は褒美と貴族としての地位により末長く幸せに暮らした。その家は何時までも暖かい心に満たされていたという。どんなに寒い時であつても。それこそが祝福であつたのかも知れない。エカテリーナの言った祝福だったのかも知れない。暖かい心の前にはどんな寒さも寒さではなくなる。人の心こそが最も尊いものなのだから。

大晦日のスノードロップ

完

大晦日のスノードロップ

2  
0  
0  
6  
・  
8  
・  
2  
1

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2204b/>

---

大晦日のスノードロップ

2008年11月7日07時18分発行